

ルターの教会論における宣教的視点 ——見える教会と見えない教会のみ言葉中心性から

石 居 基 夫*

抄 録

本稿は、ルターの教会の理解における宣教論的本質を明らかにするものである。一般に、G. ヴェルネックに見られるように、ルターの教会論には宣教的視点がないかのごとく論じられることがある。しかし、ルターの教会論はそのみ言葉中心性において優れて宣教論的性格を持っている。ルターにとっては、教会はいつでも「宣教 (Proclamation)」のために存在する。

この論述では、ルターの教会理解における見える教会と見えない教会という二重性の問題、またその終末論的性格を示し、信仰のない者たちにも、またすでにキリストの教会にある者たちにも、絶えず繰り返される神の宣教の働きを教会の脈絡の中に明らかにする。

付論として、ローマ・カトリック教会とともに宗教改革 500 年を記念したルーテル教会の宣教的課題を論じた。ルーテル教会が、現代世界の中で果たすべき宣教的責務を、具体的な日本の教会の脈絡の中で論じている。

Keywords : ルター, 教会論, 全信徒祭司, 宗教改革 500 年, 宣教論

第一章 問題の所在

今日、教会を論じる大切な視点の一つは、この教会がいかにこの世にかかわっていくのかという課題であるといわれる¹。つまり、教会論を宣教的視点において捉えるということである。この課題に関して、ルターの教会論はどれほどの貢献ができるのだろうか。たとえば、古屋安雄は『日本

伝道論』のなかで、日本の教会と神学の問題に言及し、国教会制度のもとにおけるドイツの教会の神学が、教会と宣教ということを不可分とするアメリカの教会の現状、さらにいえば日本の教会の現状と体質的な相違があることを指摘している。つまり、国教会型のドイツの神学には宣教という視点がそもそも弱いので、宣教と教会形成を一つのこととする日本の教会の現状にこの神学はそぐわないというのである²。この論法を当てはめて、そのドイツのプロテスタント神学の産みの親とも言うべきルターを見るならば、ルターの教会論に

* Ishii, Motoo
日本ルーテル神学校

宣教的視点を期待することが間違いということになるだろうか。ルターは、当時の領邦教会の中であり、崩壊の過程にあるとはいえ、ヨーロッパ中世末のコルプス・クリスチアーヌムの伝統の只中で神学をしているのである。そして実際、対抗宗教改革において生まれたイエズス会が積極的に世界宣教を展開したことに比して、ルターの宗教改革においてはそこに宣教の視点を見出すことが難しいという指摘がしばしばなされてきた³。たとえば、宗教改革500年を記念するこのとき、あの中世末の世界の激動期にきたイグナティウス・ロヨラとの比較もなされよう。ロヨラが、ルターと同じように自らの罪の苦しみの中から神の恵みと憐れみへの信仰を深めた後、トルコ、そして世界へと宣教師として歩みを刻んだことを思うと、ルターの一連の改革という歩みに宣教という視点が果たして見出せるのかと問われるのは当然とも言えるだろう。

しかし、果たして、ルターの教会論には本当に宣教の視点は見出せないのだろうか。この論文では、ルターの教会理解の中には宣教的視点がその中心になっていることを考えてみたい。教会が宣教的視点を持つということは、単に教会が宣教の方法論を持っているという意味ではない。教会というものの本質が、宣教そのものによって性格づけられているという意味である。その意味で、ルターにとっては、教会はいつでも「宣教(Proclamation)」のために存在するのだし、またそうあることが、ただ、教会を教会たらしめるという性格を持っている。事は、教会の本質にかかわる問題なのであって、単なる方策論の問題ではない。

この論文では、ルターの見える教会と隠された教会の二重性において理解する視点を手がかりとしてルターの宣教論的教会論を考えたい。

ルターは、教会を考えるとときに、あるいはその本質を語るときに、教会を二つの異なる視点から見ている。それが、「見える教会」と「見えざる教会」、あるいは「外的な教会」と「内的な教会」という区別のなかに表されている。たとえば、ル

ターは次のように言うのである。

私たちはここに二つの教会を異なった二つの名で呼ぶことにしたい。第一は、あるべき、根本的、本質的、真実のものであって、私たちはこれを霊的・内的なキリスト教会と呼びたい。第二は、作られた、外的なものであって、私たちはこれを身体的・外的なキリスト教会と呼びたい。⁴

つまり、教会の本質を語ろうとするならば、目に見えている教会を語ることだけではその本質は知ることが出来ないということである。本質的なもの、それは霊的なものであって、目には見えない。外見上これが教会だといわれるところで、実はその本質は隠されているのである。つまり、この区別によってルターが何を教会の本質と考えているのかということがよく表されることになる。

しかし、この教会を見る二重の視点は、ルターの著作の中にしばしば異なった表現、異なった内容を持ってくる。その違いは、主として、ルターがどのような論争相手に向けて語るかということによって変わってくると考えられる。それゆえに、この二重の教会理解をその多様な用法の中で捉えておく必要がある。続く各章のなかで、その用法の微妙な違いを見ていくことにしたい。

ところで、ルターがこのような二つの教会の区別をもって考えるところには、いったいどのような問題が潜んでいるのだろうか。ルターは、たとえば次のように言う。

真のキリストの国である教会が悪魔の国と区別されるのならば、悪魔の国に属する不信仰者が教会ではないというのは当然のことである。だが、この世においては、キリストの国はまだあらわにされていないのだから、彼らも教会の中に混り込んでおり、教会において職務を執るのである。⁵

ここには二つの異なる支配権の闘争が考えられ

ている。いわゆる、キリストの支配とサタンとの支配の闘争である。アウレンは、かつて教会の伝統的贖罪論を古典的タイプ、法廷論的タイプ、主観的タイプの三つの類型にわけ、ルターの贖罪理解を古典的タイプに分類してみせた⁶。つまり、そこにある神と悪魔的諸力との闘争というモチーフがルターの神学の主要な枠組みの一つとなっていると考えられているわけだが、この神と悪魔、キリストの支配とサタンとの支配という二つの勢力の闘争ということが教会の理解の根底にもある。だとするならば、この二つの勢力の闘争というパースペクティヴから、教会の宣教的な視点が見えてくるのではなかろうか。

第二章 見える教会のなかにある隠された教会

外的な、つまり制度的教会に対して、内的な見えない教会が真の教会として強調されるとき、そこでは当然信仰の強調ということが考えられている。ある人は、たまたま生まれながらに洗礼を受け、形の上で教会に属することになっている。けれども、もしそこに信仰がないならば、その人は本当に教会に属するものといえるのか。そういう問いかけになっているといってもよいだろう。また、ある意味では熱心に教を信じているようではあるが、全くキリスト以外のものを奉じているような場合も、それが教会といわれるのか。それは、ルターにとっては第一にローマの教会、とりわけ、その教職者たちに向かっての問いかけとなっているということは間違いない。たとえば、ルターが「キリスト教会は地上におけるすべてのキリスト信者のあつまりである」として、この集団が「信仰における心の集団」であるとし、「霊的な一致」のみが教会を作ると定義づけたとき⁷、その意図するところは明らかである。彼は続けて言う。

神の国は（キリストはご自身の教会をそう呼んでおられるのだが）はローマに存在せず、ローマと結びつけられてもいないし、ここに

も、あそこにもなくて、人がローマにしようが、ここやあそこにもしようが、信仰が内的に存在するところにあると理解するのである。だから、キリスト教会はローマにあり、ローマと結びつけられているとか、更には、そのかしらと権力とは神のたてたもうた秩序に由来するとか言うのは、真赤な偽りであって、キリストを偽り者とする事である。⁸

外的、身体的に教会堂に集まっているとか、制度としてローマの教会のもとに一致が保たれているということは、ルターにとって問題にならない。ただ、信仰において正しくキリストに結びつく一致があるかということが問題なのである。外的なことがらであれば、目で見て判断することは出来る。しかし、「信じているかいないかについては全くそういうわけにはいかない」⁹のである。ルターは、教会を信仰という目に見ることの出来ない内的・霊的なものを基準とした集まりとしているのである。

しかし、ルターの主張は霊的な熱狂主義とは異なる。霊的な熱狂主義は単に制度的教会によらない主体的な霊的集団を形成した。たとえば、ミュンツァーにとって教会とは「選ばれたものたち」による神の契約共同体（ブント）を意味している。それは、神との直接的な結びつき、内的な言葉を聞き、幻を見た者、そしてこの世の変革に具体的に結びついた行動（剣・暴力）を持つ者たちの集まりとなる。¹⁰意識的で主体的な信仰者共同体を真の教会とするミュンツァーは小児洗礼も否定する。神の内的な声を、霊的に直接聞き、幻を見、これに従って神の支配の実現を見える形で、しかも行ない（それは具体的には革命的活動を意味する）によって成し遂げる者のみが、真実の神に選ばれた者であり、そうした者たちの共同体こそが真実の教会を意味することになる。¹¹

しかし、ルターはあくまでも外的み言葉のおかれる制度的な教会を保持しつつ、そこに「信仰者と不信仰者の混合体としての教会」の存在を考えている。信仰者とそうでないもの分離は、終末に

神御自身の手によることを待つのである。人間は、いかなる意味でもその分離をする能力を持たないし、それは不可能なのである。そして、内的な信仰ということも、それはもちろん聖霊の自由な働きによるのだが、しかし、外的なみ言葉の語られるところに起こされるということが基本的な考えである。つまり、見える、具体的な教会におかれた職務、説教の働きに信仰は由来するのである。

つまり、ルターは外的・制度的教会の中にある真の教会を考えている。その意味では、完全な一致ではなく、外的な制度としての教会の中に普遍的教会が属していると考えられているとよい。

身体的・外的キリスト教会は、

教会法と高位聖職者によって支配されている。すべての教皇も、枢機卿も、司教も、高位聖職者も司祭も、修道会士も修道女も、そのほか、真に心の底からキリスト者であるかどうかにかかわらず、外的な事柄においてキリスト者とみなされているすべての者もこれに属している。ところで上に挙げた階級は皆信仰なしでも存立しうるので、この集団は真のキリスト者をつくりはしないが、真のキリスト者である人々なしではないのである。¹²

ここには制度的な教会がすべて真のキリスト者のみを構成員としているわけではないこと、その隠された普遍的な教会と外的な教会が必ずしも一致したものではないということが語られる。しかし、またこの外的な教会をも教会と呼ばれるよう、そのなかには真の教会が隠されている。つまり見える教会は、見えない教会を包含するように存在しつつも、それに属さない者を内にふくんでいるという関係になっている。

このような二つの教会の関係性において、先に述べた二つの支配権の闘争を考えるならば、そこには悪魔の力が本来は神の支配を具体的にあらわす教会の只中に入り込んできている事態といえよ

う。とりわけ、その教会の指導者や具体的な統治権をもっている者が、真実のキリストの教えに反するならば、それだけ事態は深刻なのである。

しかし、教会はたとえそのように深刻な事態であっても教会であり続けるというのがルターの信仰である。外的な教会が、諸々の指導者によって誤った信仰によって支配されているときにも、そのなかに信仰が全く見られないとはいえないし、また、キリストの働きがないということは断定されない。むしろ、ルターはどのような中であっても、神の働きが隠されているということを考えている。それだからこそ、たとえ異なる信仰の主張を持つ指導者によって治められる外的な、制度的な教会であっても、その教会そのものを否定したりしない。

分派主義者が支配している教会で、われわれが今日、同じような悪事を見るのを余儀なくされても、不思議ではない。われわれが死んでから、彼らはほかの教会も占拠して彼らの毒で汚し、覆してしまうであろう。それでもなお、キリストは世の終わりに至るまで、それも、教皇制のもとにおいてと同様に、ふしぎな仕方でも、支配しつづけるであろう。¹³

ルターにとって、その教会論の基礎はあくまでも、キリストの支配にある。外的な、この世のありようがいかに悪魔的なものによって支配されてしまっているように見えたとしても、その只中にあるキリストの支配の圧倒的な力をルターは決して疑わないのである。

第三章 見える教会と見えない教会の一致

さて、今見てきたように、ルターは見える制度的な教会と見えない、隠された霊的な教会とを区別して呼んでいる。しかし、実際のところ、その二つは別々の二つの教会なのか。むしろ、ルターは一つの教会を異なる視点から見るとこのような表現を用いているといったほうがよい。

肉の罪の教会の現実、しかし、それが信仰に

においては聖なる教会なのである。それはキリストを信じる信仰によってのみ、教会が教会であるということに他ならない。つまり、見える教会と隠されている教会は二つの異なる教会なのではなく、むしろ、この二つの教会は一つの教会である。ルターは教会を二つの呼び方で呼ぶようにいいながら、このように言っている。

それは私たちがこの二つを互いに分けてしまいたいということではなくて、ちょうどあたかも私がひとりの人間について語りながら、その人を魂に应じて霊的な人間と呼び、身体に应じて身体的人間と呼んだり、あるいは使徒《パウロ》が内的な人と外的な人についてよく語っている（たとえばローマ七・二二以下）とおりでである。¹⁴

つまり、見える教会と隠された教会の理解は、ちょうど義認の教理の持つ論理と同じように、人間の現実を神の現実の中で、信仰において見るということを現すのである。言い換えるならば、全く罪と悪の中にある誤った者たちが、神の業の中で、日々新たに聖なる者とされ、そこに教会が生まれさせられているということを見ているとよい。ルターによれば、「たしかに教会は聖であるが、しかも同時に罪人である」¹⁵のである。見える教会の現実、そこに集う者たちは、人の前においては、少しも正しくないし、また、聖いとも言われぬ。それにもかかわらず、神の福音によって、すなわちキリストによって聖とされ、神の前に義しいものとされるのである。それが、私たちのありようであり、また、教会の姿である。

そのとき、神の前に正しい者とされるというのは、全く神のみ業にほかならず、自分たち人間の側にそのための条件は一切ない。ことはただ神の恵みのみ業によって、信仰が与えられ、罪人に過ぎない者たちが神のものとしてされるということなのである。そして、教会は外的に見ればこの全く罪に過ぎないもの、神にふさわしくないものが、霊的に神の恵みによって神のものとしてされているとい

うことなのである。

私もあなたも聖いし、教会も町も民も聖いが、それは自分の聖さによらず、外からの聖さによる。能動的な聖さによらず、受動的な聖さによる。神的な聖いもの、すなわち、教えの務めの召命や福音や洗礼などを持っているから、それによって彼らは聖いのである。¹⁶

つまり、ルターは外的に見える教会の現実に対して、霊的な隠された神のみ業の働きを語るのである。

それでは、外的に見える教会が、目に見えない隠された教会と一つであること、つまり人間の信仰において外的にはなんら善ではないものであっても神のみ業によって聖い正しいものとされているということに、神と悪魔の闘争というあの視点はどのような関係にあるのだろうか。それは、他にもなく私たち人間がどのようなものであるかという問題と密接に関係していると知るべきである。つまり、ルターにとっては、「悪魔が生きており、いや、それだけでなく、全世界を支配していることは否定されえない」¹⁷のである。「われわれのだけれも、悪魔に抵抗しうるほど強固ではない」¹⁸。この悪魔から自由になるのは、人間自らの力ではありえず、ただ、キリストの力、その十字架と復活における悪魔に対する勝利によらなければならない。

しかし、それは単なる二千年前のあの十字架で成し遂げられたという手続きなのではない。ルターは「キリストのみが罪と死と悪魔の勝利者であると説教する信仰の」¹⁹ 教えを強調する。つまり、神のみ言葉が語られることによって、私たち一人一人のうちに神と悪魔の闘争が繰り広げられ、私たちがキリストによって勝ち取られる出来事もたらされると考えているのである。そして、その勝利は、ちょうど十字架のキリストが死んで葬られ、敗北したものであるかに見えたのと同じように、隠された勝利なのである。

それだから、罪は、たとえ認められ、感じられても、実際には存在しない。なぜなら、パウロの神学によれば、罪も死も呪いもはやこの世にはない。われわれを呪いから解放するために、呪いとなって、世の罪を取り除かれた神の子羊であるキリストのうちにある。これに対して、哲学や理性によれば、罪や死などはこの世や肉や罪人のうち以外のどこにも存在しない。・・・(中略)・・・しかし、真の神学は、もはやこの世に罪は存在しないと教える。イザヤ書五三章〔六節〕によれば、父(なる神)が全世界の罪を負わせたキリストがご自身の身体において罪に勝利し、罪を打ち倒し、罪を殺したからである。彼はひとたび罪に死に、真に死人の中から復活して、もはや死ぬことはない。それゆえ、キリストを信じる信仰のあるところではどこでも、事実、罪は減ばされ、死に、葬られている。しかしキリストを信じる信仰のないところでは、罪は存続している。聖徒といえども完全に信じているわけではないから、聖徒のうちにもまだ罪の残りがあるとはいつても、その残りは死んでいる。キリストを信じる信仰のゆえに、それはその人に着せられることがないからである。²⁰

つまり、罪と死と悪魔によって支配されているこの世の中であって、信仰が与えられ、キリストに結ばれたものは、まさにその信仰において、キリストの支配のうちに生きる。それは、理性的な目によっては認識されえず、ただ信仰によって知られるのである。ルターにとって、信仰とは「人間を戦場とした、神とサタンの戦い」²¹なのであって、キリストによって絶えず勝ち取られる勝利によって、私たち一人一人も、そして教会もその信仰を生きるのである。しかし、まさにこの二つの勢力の闘争の只中にあるがゆえに、教会もまた「戦う教会」²²と呼ばれる。その戦いとは、教会が信仰において、絶えずその務めを果たすということであり、具体的には「みことばの務めを続けつ

つ、すなわち、福音を教え、広めつつ—これこそ産むということである—教会は世の終わりに至るまで間断なく子らを産みつづける」²³ということの意味するのである。

教会が外的には全く罪と悪の支配のもとにあるようであっても、その同じ教会が神の力と支配のもとにおかれおり、その神が教会において絶えず働かれているのである。だから教会は、その神御自身の働きに召され用いられているものでもあるのだ。そこに教会の宣教の最前線があるといえるだろう。

第四章 見える教会にまだまだ属していない 隠された教会

ルターによれば、真の教会は隠されており、その本来の姿は、ただ終末においてのみ明らかにされる。だから、その終末を先取りして、今私たちがその教会の範囲を限定することは出来ない。

信仰のゆえにキリストの国と呼ばれる。それはかくされていて、あきらかではないが、福音がこれをわれわれの前に置く。それはまた、神の国とも言われる。なぜなら、今信仰において成り立っているものが終わり、今のようにかくされていなくなるのである。み子がご自身とその国とを父に渡し、自ら父に従うということによって、パウロはこのことを意味しているのである。すなわち、キリストが信仰において統治なさるこの国を、キリストはあらゆる信仰やおおいなしに、全能の神の主権のまえに置き、これを神に渡されるのである。しかもキリストは王でありつづけられる。²⁴

その終末時を先取りして、今ある教会の内側にのみ真の教会があると断定は出来ない。たとえば、「大教理問答」のなかで聖霊の働きを述べる中で、ルターは次のように言う。

さて、常に活動を続けていなければならない

のは本条である。創造はすでに完了し、贖いもまた成就している。しかし、聖霊は最後の審判の日まで絶えまなく働きを続けられるからである。そのために聖霊は地上にひとつの会衆（教会）を定め、それをとおしてすべてを語り、また働かれる。というのは、聖霊がまだ必ずしもすべてのキリスト教会を招き集められたわけでもなく、ゆるしを与えてしまわれたわけでもないからである。それゆえに、われわれはみことばによって日々われわれをここに導き、同じみことばによって信仰と罪のゆるしを賜わり、かつこれを増し強められる聖霊を信じるのである。²⁵

つまり、目に見える形での教会の外には、いまだ招き集められてはいないが、神によって集められるべき、つまり、そのように神がのぞみ、またそう決めたもう人々がいるのである。今は教会に属さないが、終わりの日にいたるまでに、主が招き集められ、キリストに属するものとされる者たちがあるということである。

しかし、そのことによって、見える教会と無関係に、キリスト教の信仰を持たない人たちが実は神の国にあるといったようなことが考えられているわけではない。むしろ、今の見える地上の教会との関係の中で、しかも、それはまさに宣教的なかわりの中において考えられていることを確認しなければならない。ルターにとっては、み言葉を伝える宣教の務めが教会を教会とするのである。

われわれは福音を宣べ伝えるようにという神的な委託を受けている。この福音は全ての人に、信じるなら、キリストのゆえに無代価で、律法や罪や死や神の怒りなどからの自由を告げる。この自由をかくしたり、福音によってすでに明らかにされたのに、曖昧にしたり、取り消したりすることは、われわれの思いのままにはならない。キリストがこれをわれわれに与え、死をもって獲得してくださったか

らである。²⁶

ルターは、これほど明瞭に、宣教が教会の必然的な務めであることを語るのである。

だれが真の見えざる教会に属するものなのか、そのことは何らかの形で判断することは私たちには出来ないし、またしてはならない。むしろ、既に見える教会の中にある者たちも含め、常に悪魔のとりこになる私たちが、キリストの福音に与るべきであることを、ルターは考えているのである。

たとえあなたがこの上もなくみことばに通じ、すべての事柄の師であったとしても、あなたはやはり日ごとに悪魔の支配下にいるのであり、悪魔は夜昼休まずあなたにしのびよってあなたの心の中に、これまで述べた戒め、およびすべての戒めに反する不信仰と悪い思いとをたたきつけようとしているということである。それゆえ、あなたは心の中にも、口にも、耳にも、絶えず神のことばをもっていなければならない。もし心がなまけていて、みことばが響かないと、さっそく悪魔が侵入してきて、それと気づかぬうちに害をなしてしまう。²⁷

神の支配、キリストの支配と悪魔の支配の戦線は絶えず動いている。だから、日々、刻一刻、悪魔が私たちに害をなそうとする、その力に対し、神のみ言葉が働き、これを退けるのである。つまり、神の支配はそのみ言葉の力によって絶えず新たに人々の間に信仰を起こし、信じる群れへと導くものであり続けると知らなければならない。

第五章 見えない、隠された神の働きと見える教会の具体的働き

さて、ルターの見える教会と隠された教会という視点によりながら、また、その背後にある神と悪魔の闘争という神学的な構図を見ながらルターの教会の理解の中にある、宣教的な視点を確認

してきた。そこで、この章ではそうしたルターの教会理解の中であらためてこの「見える教会」、つまり私たちが日々経験をしている教会の現実について宣教論的な特質がどう現れてくるのかということを見えてみたい。

まず、第一には、み言葉の中心性ということを確認したい。ルターは二つの支配権の闘争において教会は神の働きをみ言葉（福音）において動的にとらえていく。ルターが、ルター自身を破門にし、誤った指導者たちによって導かれ、福音の正しい教えをあいまいにするローマの教会を、それでも「教会」と呼ぶのは、そこにみ言葉があるからである。

われわれも今日、たとえどれほど歪んでしまっており、そこに仕える者が悪いとしても、ローマの教会を聖と呼び、全ての司教座を聖と呼んでいる。神は「その敵の只中で支配なさる」〔詩篇一一〇篇二〕からであり、「反キリストは神の宮に座す」〔第二テサロニケ二章四〕からであり、悪魔は神の子らのただ中にいるからである。・・・中略・・・ローマの教会は、神の聖なる名と、福音と、洗礼などを持つがゆえに、聖いのである。・・・中略・・・われわれはわれわれのうちに神の働き、すなわちみことばと聖礼典とをもっている。これらのものがわれわれを聖とするのである。²⁸

つまり、だれも完全にその国に属しているわけではない。ただ、始められたキリストの働き・わざに与ることにおいてのみ、キリストの教会に属する者である。そのキリストのわざは、み言葉の宣教（Proclamation）である。「見える教会」は、まさにこのみ言葉が働くところとして、神が定めたもうものなのである。このみ言葉において、見える教会がまさに教会として存在する。

教会は、信仰のみことばにより、信仰をとおして生み出され、同じことばによってやしなわれ、支えられるからである。すなわち、教

会自体は神の約束によって建てられ、神の約束は教会自体によって建てられるのではないからである。実に、神の御言は圧倒的に、教会のうえにあり、教会はこの御言のなかで作られたものとして、制定し、秩序を与え、行なう何をももたなくて、ただ、制定され、秩序付けられ、働かかけられるだけである。²⁹

み言葉の職務は、「見える教会」のなかにおかれている。しかし、同時に、この「見える教会」の上に神のみ言葉は働いている。教会そのものが、み言葉によってその時々、つまりその時代や状況の中でふさわしく整えられていくのである。ルターはみ言葉の中心性のゆえに「見える教会」と「隠された教会」の区別と一致を捉えているのだし、また、教会とは宣教（み言葉が宣べ伝えられること）そのものとして考えられていると言いえるのである

第二に、ルターの教会理解の中には、全信徒祭司的な教会の宣教論が位置づけられるよう。その教会の宣教的性格は、まさに教会が聖徒の交わり、み言葉と信仰によって集められ、聖とされた者の集まりそのものに帰せられていることを知るべきである。教会の宣教とは、教会の持っている宣教の方策、とりわけ具体的な海外伝道などの働きのあり方にのみあるのではない。私たち一人ひとりの信仰の生き方の中にある。いや、私たちを通し、私たちを用いて働く聖霊の力によるものであることを語るのである。

聖霊は、最後の審判の日まで、聖なる会衆、すなわちキリスト教界のもとにとどまり、この会衆をとおして、われわれを導き、またこの会衆を用いて、みことばを宣べ伝え、こうして聖化を成就し、またそれを増し加え、その結果この会衆が日ごとに信仰と、聖霊の結ぶ信仰の実とを増し強められるのである。³⁰

つまり、全信徒祭司的なルターの教会理解そのものの中に宣教論の基礎があるといえよう。³¹ 神

御自身は、信じる者を集め、起こし、そうして、その者たちによってこの教会を成長させる。その成長は単なる数字の増加ということよりも信仰そのものが深められることをも含めて、神の国の実現、悪魔の支配に対する神の勝利を実現していくものであることを表しているのである。

このことに関連して、さらに大切なことはキリストの勝利は、十字架の勝利であることがルター神学の要であるということである。つまり、ルターの宣教論の第三の特質としての隠された勝利という視点である。神の宣教の働きが神と悪魔との戦いという視点なかで捕らえられるとき、その特徴としてそれが隠された勝利という性格を持つのである。すなわち、その勝利は教会の量的な増大とかキリスト教的文化の一元的支配が実現をするということではないということである。むしろ、キリストの十字架が人々のために仕え、友のために命をささげ、むなしく見える姿をとったように、教会は見た目には敗れ去るかのように見えるかもしれない。しかし、それにもかかわらず、復活の主の栄光が示されるように、勝利がある。神の言葉の勝利が確かになる。これは、教会の宣教を考えていく上できわめて大事な視点である。19世紀から20世紀のはじめまでの、世界のキリスト教化を単純に目指した教会の勝利主義の宣教論は、この視点から批判されなければならないのではないだろうか。ポスト・コロニアル時代の教会がこの世界の多様な文化的宗教的文脈の中で、一義的にキリスト教勝利主義のような宣教論を標榜する過ちを犯してはならないと思う。

たとえば、ルターは「公会議と教会について」の中では教会の第七のしるしとして「聖なる十字架」を持つことといい、すなわち「苦難を引き受けること」ということをあげている。³²「十字架」といい「苦難」といい、それらが教会のしるしであるということの意味は、単に教会がこの世において目に見える勝利と栄光を表すものではないことをはっきりと示しているのである。フィリップ・ヘフナーによるならば、教会がキリストを証しするという点において教会はこの世での苦難を負

うことになるのだから、まさに、この世へのかかわりということが教会のしるしとなっているという。³³つまり、具体的なかたちで、苦難を負うこと、他者のために苦しみを負っていく十字架こそがその教会の宣教の意味をあらわすことを知っておく必要がある。

その意味から考えるならば、宣教が単に教会の福音の説教ということに限定されないことは明白である。むしろ、神のみ言葉が教会全体をして、社会的な働き、奉仕のわざに動かしていくこと全体が教会のキリストの働きであり、宣教の実質として考えられているといえようか。つまり、この世への働き、かかわりが積極的に位置づけられているのが、ルターの宣教論的教会論の第四の特徴なのである。そして、この世への働きということから言えば、ルターが神の霊的な統治と共にこの世の統治についても語り、しかもそこに教会の積極的な位置づけを語っていることを忘れてはならない。この領域は、理性の領域であり、また、他の信仰を持つものも等しく神に用いられる領域である。この世の秩序を守り、正義と公平、平和を守ることがらもまた当然神のみ業なのである。その働きは主として、律法の領域とも呼ばれるが、それもまた神の言葉であることには違いない。み言葉にかかわる教会が、具体的なこの世の問題にかかわる視点は、このみ言葉を軸にしながら見えてくることである。伝えるべき福音は、律法の業によらない、信仰のみによる義認、救いの恵みである。しかし、この世にある私たちがいかに人に仕えていくべきかを示すことは、教会の大事な務めとして考えられている。しかも、それを訓戒する言葉によってなすのが教会なのである。

全力をあげて肉の放縦へと突っ走るあの豚どもを、自らのからだと財貨をもって他人に仕えるように強いることはできない。それだから、われわれはできることをしよう。すなわち、これはなすべきことなのだ、熱心に訓戒しよう。もしわれわれの訓戒によってもなにも起こせなくとも、ことを神に委ねよう。³⁴

最後に「ことを神に委ねよう」といわれるのは、決して責任を逃れることや、消極的な意味合いで言われるのではない。むしろ、まさに信仰における神の主体性と、その最終的な裁きと救いへの希望とに裏付けられながら、教会のなすべき働きを見出しているのである。この世に関わることは、とりわけ、ことが悪魔との戦いということであるならば、なおのこと教会は無関心ではいられない。

正しい教師は信仰についての教えと同様に、よい行いについての教えも熱心に訴える必要がある。サタンはこの両方に腹を立てて、激しく抵抗するからである。しかし、信仰がまず最初に植えられるべきである。それがないと、なにがよい行いであり、なにが神に喜ばれるかを知ることが不可能である。³⁵

このように見てくると、ルターにとって、教会の宣教という問題は、何よりも福音と信仰に関わるのであるが、しかし、同時にその福音の領域というにとどまらず、神の左手、律法の領域に関わっていることを当然と考えているといつてよいだろう。いわゆる「二王国論」的な区別によって、教会の働きをこの世のものと区別してしまうということは、本当の意味でルター的ではない。むしろ、神の二様の支配のなかに、教会の役割をしっかりと続けるべきことをルターは考えている。

ルターは、この世の統治の具体的な身分・秩序として三つのもの、すなわち国家と教会と家政を挙げている³⁶。すなわち、教会は単にみ言葉の宣教という霊的なみ業、すなわち罪の赦しと永遠の命を与えることに仕えるばかりではなく、この世での具体的な働きを担うべきものと考えられているのである。この点については、ルターはそれほど具体的に展開をしていないけれども、彼自身のみ言葉の務めによって、共同募金や教育の問題など³⁷、当時の社会的な問題に関わってかなり具体的な提言をしているところを見れば、教会がこの世の秩序やその必要に対して深い関心をもち、取り組んでいくべきものであることを物語っている

といえよう。

ルターの生きた時代の、その社会における教会の位置づけがそのまま現代に、そして、世界中どこにでも同じように適用されることはありえない。しかし、教会が現実のこの世の問題にかかわって責任を分かち持つことを積極的に見ていくことが必要であろう。

こうしてみると、単に目に見えない教会の働きを考えるよりも、具体的な、見える教会のわざの重要性³⁸を知らなければならないことがよく分かる。ルターはいかなる場合にも、見える教会から離れた見えない教会を主張しない。見える教会にある主の働きこそが見えない・霊的な教会を保障するのである。そして、その具体的な働きはこの世の権力がなすようなかたちでこの世の統治に関わるのではなく、むしろ、絶えず神のみ言葉を語ることによってなされるものであることが確認される。そして、そのみ言葉とは、律法と福音という二重性をもっている。この二重性は、見える教会と見えない霊的な教会の二重性に対応する。その二つの異なる言葉、しかし、二つながら一つの神の言葉としてかたられるみ言葉を担う教会の務めが、教会の宣教の展開を保障している。

こうして、私たちは再びルターの教会の宣教理解におけるみ言葉の中心性を見出すのである。が、何よりもこの神の言葉と働きが見える教会を通して、しかも具体的な信じる一人ひとりを動かし、実りを生むことに対する信頼が、ルターの教会の宣教論を形成しているというべきだろう。そして、宣教の進展を何よりも目に見える成果に求めるのではなく、召された一人一人が、終末論的な神の主権と勝利を望み見つつ、他者のために苦難を負い、罪と悪魔と死に対して戦って生きる姿そのものの中に見ていく視点を持っていることが知られるのである。

付論

さて、最後に付論として、この宗教改革500年という記念の時に、現在のルーテル教会の宣教的視点ということを確認しておきたい。この記念す

べき年が、特別な意味を持つのは、500年前に互いに断罪し合い、分裂に至ったローマ・カトリック教会とルーテル教会との間で和解と一致が確認されてきたことにある。そして、その一致において目指されていることが、単に両教会の間のことからということに留まらず、むしろ、福音を証し、世界の宣教という責任を受け取っていくものとして考えられてきている。つまり、見方を変えれば、福音宣教が教会の使命であるということが、教会の分裂と争いを克服させたと言ってもよいだろう。

たとえば、ローマ・カトリック教会とルーテル世界連盟との間で、1967年以来重ねられてきた国際レベルでの対話は、宗教改革500年と共同で記念するために『争いから交わりへ』を公にした。そこには、両教会が過去のあやまりを悔い改め、福音のもとに和解と一致を確認し、またそれを今後も目指していくことを表明しているのだが、その一番終わりに、「カトリック教会とルーテル教会は、世に対する宣教と奉仕の中で、神の憐れみを共に証ししなければならない」³⁹と述べている。すなわち、この両教会の一致と和解の目指すべきところを、この世における宣教の責務ということで締めくくっているのだ。

これによって、2017年、キリスト教会の歴史に新しい1ページが開かれたといえるだろう。世界各国で、カトリック教会とルーテル教会とが共同で宗教改革500年を記念し、礼拝や各種の催しをもつことになった。そこで肝心なことは、この和解や交わりが、単に両教会のためにあるというよりも、むしろ教会の宣教的視点において考えられていることにある。

前年の2016年10月31日には、ルーテル世界連盟発足の地、スウェーデンのルンドにおいて、カトリック教会のフランシスコ教皇とルーテル世界連盟のムニブ・ユナン議長とが共同で司式をしてプレ500年の礼拝が行われたが、礼拝後に両者の「共同声明」が出された。そこには、ほぼ『争いから交わりへ』で語られてきたことが短い言葉によって確認されたと言ってよいと思うが、宣教

という視点においては、一歩踏み込んだ表明を行っている。

すなわち、「カトリックの者たちとルーテルの者たちがイエス・キリストの福音を共に証しし、神の救いの働きを受け入れるべく人々を招く」⁴⁰として、福音宣教の責任を明らかにしているのだ。そして、さらに続けて、この世における奉仕の働きとして、「わたしたちは共に奉仕の務めに立って、特に貧しい人々のために、人間の尊厳と権利とを高め、正義のために働き、あらゆる形の暴力を斥けることにおいて共に奉仕に当たることができるよう、霊の導きと勇気と力とを神に祈ります。尊厳、正義、平和、和解を切に求めているすべての人々にわたしたちが近づくよう」⁴¹に呼び掛ける神に應えるものとなることを表明している。

つまり、中心はキリストの福音を宣べ伝え、人々と分かち合うこと。しかし、信仰への招きということだけを宣教の責務とするのではなく、この世界に神のみこころである正義・公平・平和を実現していく務めを重く受け止め、その責任を担っていくべきことが表明されているのだ。終末に至るまでの、神の福音による支配と律法による支配の両方に深く関わる教会の務めが考えられていると言ってよいだろう。

とりわけ、教会の公共的使命という意味において、現代世界という文脈をしっかりと見つめ、今も多くの人々が差別や争いや暴力によって人間の尊厳を奪われていることを課題としていることがわかる。声明は、そういうのちの尊厳と正義、平和と和解を求めている人々に「近づく」ことへと神が呼びかけておられると招いている。その人々に「近づくこと」は、具体的に関わり、苦しみに触れ、共に生きることだ。福音を限られた人々の中にとどめるのではなく、貧しい人や苦しみの中にある一人ひとりへと届けること、逆にいえば、そうした人々を自分の場所へ招くこと、受け入れていくことをキリストの教会の務めしているのだ。

日本では、この声明から一年後、日本カトリック司教協議会と日本福音ルーテル教会とが共同主

催で、長崎のカトリック浦上教会を会場に宗教改革 500 年の共同記念としてシンポジウムと礼拝を行った。両教会は、日本でこの宗教改革 500 年を共同で記念することが、一つのメッセージとなることを強く意識して取り組んできた。今日本が直面している課題を、ある意味で現代世界の大きな矛盾や恐れを象徴するものとして捉えるならば、まさにそこで両教会が宣教の課題をしっかりと見つめつつ、共にみ言葉に聞き、共に祈ることで世界に対する一つのメッセージを発信しようと考えられてきたのだ。日本は、現代世界の苦悩を、特別な仕方で象徴的に経験していると言えるだろう。唯一の戦争被爆国であり、また近年では 3・11 以後、フクシマの深刻な原発事故を抱えている。世界でもトップクラスの技術先進国において、「核」という人類史上もっとも大きく、危険な「力（パワー）」の戦争利用と平和利用の両方の開発からもたらされる「スティグマ」を日本という国が負ってきたのだ。そして、この「力」こそが、いま世界のなかに深い分裂、格差を造り出し、人と被造世界全体のいのちの尊厳を奪い続けている。そして、誰もがこの「力」の恐ろしさを知っているにも拘らず、同時にこの「力」の魅力によってこれを捨てることができないでいる。だからこそ、この力のもとにある苦悩の只中で、神の支配を求め、平和を祈り、教会が多くの人々とともにこの苦しみに連帯していく宣教の使命を表すことが、日本で宗教改革 500 年を記念しつつ、教会が新しい歩みをはじめていくのにふさわしい時となると考えられてきたのである。

「平和を実現する人は幸い」をテーマとして、被爆の地、そして権力による信仰といのちへの暴力としてのキリシタン弾圧の町、長崎は浦上での共同記念。偶然の要素もあって、この地が選ばれたわけだが、まさに神によって選ばれたのだと言ってもよいだろう。私たちは、キリストの教会として、今新しく宣教の使命を確認している。教派の違いを超えて造り出されているエキュメニカルな交わりが、宣教における一致であることをしっかりと受け止め、ルーテル教会もカトリック教会も

新しい歩みを刻んでいくことが求められている。そして、それはルターの宗教改革の中心である、神のことばの宣教が生き生きと現代のなかに一つの形を表していることとして考えられるように思うのだ。

現実の世界におけるキリストの教会の宣教は、それゆえ、神のみことばによる働きであり、それによって今分たれている教会も一つとされつつ、福音によって神の前に義とされた者たちが、天においてそうであるように、この世においてもまた、神の義の実現をもたらすように生かされていくことだと言うことだろう。宗教改革 500 年の年に、そのような神の愛の働きが証しされたことと知りたい。

注

- 1 WCC Faith and Order, *The Nature and Purpose of the Church: A stage on the way to a common statement*, Faith and Order Paper No. 181-November 1998 参照。とりわけ、1-B God's Purpose for the Church には宣教論的な教会の位置づけが明確にされている。また、カトリックの立場から高柳氏も次のように言っている。「宣教は教会の生命です。宣教しなければ、教会はその存在理由を失うからです。」高柳俊一「現代神学における教会論」『教会 その本質と課題を学ぶ』百瀬文晃編 サンパウロ 1995 年
- 2 古屋安雄『日本伝道論』教文館 1995 年 10 - 32 ページ参照
- 3 たとえば、ヴァルネックは、宗教改革の神学者がカトリックのように宣教の視点も活動も持つことがなかった一般的に言われる理由、すなわち宗教改革のドイツ諸教会がカトリック諸国のように、非キリスト教国との直接の交易に乏しく、海外伝道といった視点をもち得なかったという外的条件をこえて、それが神学的な問題であったという。すなわち、ヴァルネックは、ルターが彼自身の時代についてすでに世界に福音は告げられており、宣教の課題が過去のものであるとしていることや、あるいは、その選びの思想や終末思想が宣教的関心を乏しくさせ、むしろ世界宣教という考えを妨げていることを指摘する。
Gustav Warneck, *Outline of a History of Protestant Missions from the Reformation to the Present Time with an Appendix Concerning Roman Catholic Missions* (NY: Fleming H. Revell Co, 1906) 8-24.
- 4 ルター「ローマの教皇制について」『ルター著作集』第

- 一集 3 卷 135 ページ
- 5 「アウグスブルグ信仰告白弁証」『一致信条集』聖文舎 243
- 6 グスターフ・アウレン『勝利者キリスト：贖罪思想の主要な三類型の歴史的研究』内海草、佐藤敏夫訳 教文館 1982 年
- 7 ルター「ローマの教皇制について」128 ページ
- 8 同 129 ページ
- 9 同 133 ページ
- 10 倉松功『ルター、ミュンツァー、カールシュタット』107-116
- 11 トーマス・ミュンツァー「信仰の表明または提言」松山與志雄訳『宗教改革著作集 7 ミュンツァー、カールシュタット、農民戦争』教文館 1985 年 参照
- 12 ルター「ローマの教皇制について」135 ページ
- 13 ルター「ガラテヤ大講解」下 ルター著作集第二集 12 卷 聖文舎 164 ページ
- 14 ルター「ローマの教皇制について」135 ページ
- 15 ルター「ガラテヤ大講解」上 ルター著作集第二集 11 卷 聖文舎 165 ページ
- 16 ルター「ガラテヤ」上 42 ページ
- 17 同 284 ページ
- 18 同 289 ページ
- 19 同 332 ページ
- 20 同 420—421 ページ
- 21 ピノマ『ルター神学概論』聖文舎、1968 112 ページ
- 22 ルター「ガラテヤ」下 218 ページ
- 23 同 220 ページ
- 24 ルター「聖パウロのコリント人への第 1 の手紙第 15 章」ルター著作集第二集 10 卷 93 ページ
- 25 「大教理問答」『一致信条書』620 ページ
- 26 ルター「ガラテヤ」下 316 ページ
- 27 「大教理問答」558 ページ
- 28 ルター「ガラテヤ」上 41 ページ
- 29 ルター「教会のバビロン捕囚について」323 ページ
- 30 「大教理問答」618 ページ
- 31 D.H.-W. Gensichen “Were the Reformers Indifferent to Mission?” In *History’s Lessons for Tomorrow’s Mission: Milestones in the History of Missionary Thinking*, (Geneva: World’s Student Christian Federation, 1960) 123.
- 32 M. Luther, “On the Councils and the Church,” In *Luther’s Works Vol.41* (Philadelphia: Fortress Press, 1966) 164.
- 33 Philip Hefner “The Church” *Christian Dogmatics Vol.II*, Braaten & Jenson ed. 235
- 34 ルター「ガラテヤ」下 316 ページ
- 35 同 319 ページ
- 36 ルター「キリストの聖餐について」ルター著作集第一集 8 卷 聖文舎 326 ページ
- 37 ルター「共同基金の規定 1522 年」、「ドイツ全市の参事会員にあてて、キリスト教的学校を設立し、維持すべきこと 1524 年」ルター著作集第一集 5 卷、「人々は子どもたちを学校へやるべきであるという説教 1530 年」ルター著作集第一集 9 巻など
- 38 ボンヘッファーは、み言葉の受肉という視点から見える教会がこの世に場所を持ち、具体的にこの世に対して宣教と奉仕の務めを持っていることを明確にする重要性を述べている。ボンヘッファー『キリストに従う』森平太訳 新教出版社 1966 年 278—309 ページ参照
- 39 一致に関するルーテル＝ローマ・カトリック委員会『争いから交わりへ』ルーテル/ローマ・カトリック共同委員会訳 教文館、2015 年 163 ページ
- 40 機関誌『るうてる』日本福音ルーテル教会発行 2016 年 12 月号 4 ページ
- 41 同 前

Missiological Perspective in Luther's Ecclesiology: From His Centricity of the Word of God in the Notion of the Visible and Invisible Church

Motoo Ishii

This essay asserts that Luther's idea of mission is the essence of his ecclesiology. In general, as shown by G. Warneck, it has been well discussed that there is no missiological perspective in Luther's ecclesiology. However, Luther's thought about the church shows strong missiological characteristics in his centricity of the Word of God. In Luther's thought, the church should exist only for proclamation.

In this essay, the twofold nature of the visible and invisible church, and the eschatological framework in Luther's understanding of the church are clarified, then the mission of God both for the non-Christian as well as for the Christian, are seen in the context of the church.

In the appendix, some points are considered regarding the missiological problems of the Lutheran church, which with the Roman-Catholic Church has recently commemorated the 500th year anniversary of the Reformation. The task of mission, which the Lutheran church should carry out in the modern world, is discussed in the concrete context of the Japanese church.

Keywords: Luther, ecclesiology, the priesthood of all believers, the 500th anniversary of the Reformation, missiology